

中国の言語

三木友里*

呉 安其**

アジアの各民族は、漢蔵 (Sino-Tibetan)、アユタヤ、印欧、ドラヴィダ、南アジア、(太平洋) 南諸島等の系統の言語を使用している。漢チベット語系統の言語は、主に中国、タイ、ラオス、ミャンマー、ヒマラヤ山地区に分布している。アユタヤ語系統と印欧語系統の言語が主に分布するのは、中国北方、北アジア、中央アジアおよび西アジアである。南アジア語系統は主に東南アジア、ドラヴィダ語系統は主にインド南部とスリランカ、パキスタンに分布する。

中国人の言語において、漢蔵 (漢チベット / Sino-Tibetan) 語系統の属するものは五十種類以上、アユタヤ語系統に属するものは二十種類ある。南島語系統に属するのは 15 種類 (または 15 以上)、南アジア語系統は五種類 (またはそれ以上) である。印欧語に属するのはタジク語とロシア語のみであり、その他に朝鮮語がある。

それでは中国における様々な言語を民族・地域分布の面から考察していく。

(1) 漢語

漢語は、漢、満州、ウイグル、畚 (シェー) 諸民族の使用する言語であり、また、中国の異なる民族の族際語である。中国国境内で漢語を使用するのは 97726 万人、その内の 3600 万は非漢民族とされる (1982 年)。その他に、1800 万人以上が漢語を第二言語としている。中国国境外でも、2217 万人あまりが漢語を使用する (1987 年)。漢語は北京語の発音を標準とし、標準語は北方方言を基礎方言とする。漢語には 7 大方言があり、北方方言・呉方言・湘方言・贛 (カン) 方言・客家方言・粵 (エツ) 方言・閩 (ピン) 方言という。

北方方言は主に長江以北地区・長江南岸九江以東、鎮江以西の長江沿岸地帯・湖北・四川・雲南・貴州・広西西北・湖南南西に分布し、7.203 億人が使用する (1984 年)。この他、台湾で 228 万人が使用する (1979 年)。

呉方言は江蘇南部と浙江に分布し、7711 万人が使用する (1984 年)。

湘方言は湖南と広西北部に分布し、3601 万人が使用する (1984 年)。

贛方言は江南に分布し、2058 万人が使用する (1984 年)。

客家方言は、広東・福建・江西・台湾・広西・湖南・四川等に分布する。大陸ではあわせて 2572 万人 (1984 年) が使用し、台湾では 200 万人が使用している (1984 年)。この他にマレーシア (98 万人使用)・インドネシア (64 万人使用、1982 年)・シンガポール (6.9 万人、1980 年)・タイ (5.9 万人使用、1984 年)・フランス領ポリネシア (2 万人使用 1987

年)・スリナム(6000人使用)・パナマ(6000人使用、1981年)、ブルネイ(3000人使用、1979年)などに分布する。

粵方言は主に広東と広西に分布し、中国大陸はあわせて4630万人が(1984年)、香港では529万人が使用する。この他にまだマレーシア(74.8万人使用)・ベトナム(50万人使用)・マカオ(50万人使用)・シンガポール(31.4万人使用)・インドネシア(18万人使用)・アメリカ(18万人使用)・タイ(2.9万人使用)・ニュージーランド(2万人使用)・フィリピン(6000人使用)・プエルトリコ(4500人使用)・ブルネイ(4500人使用)・カナダ(数十万人使用)・ナウル(680人使用)に分布する。

閩方言は、その系統内も比較的複雑で、閩南語と閩北語は互に通じず、南北それぞれの方言は土着語としてもその差異は大きい。閩南語は主に福建南部に分布し、この他に台湾・広東・海南・浙江・江西にも分布する。中国大陸では2575万人が(1984年)、香港では54万人が使用し、台湾でも1417万人が使用する(1986年)。閩北語は主に福建北部に分布し、1029万人が使用する(1984年)。この他、閩南語はマレーシア(195万人使用)・シンガポール(117万人使用)・タイ(108万人使用)・インドネシア(70万人使用)・フィリピン(49万人使用)・ブルネイ(1万人使用)にも分布する。

漢語は漢チベット語系の言語である。“漢人”という呼び方は、本来漢代、匈奴人が中原に住む民に対して呼んだものであり、以来漢民族の自称となった。漢族の祖は、夏・商の時代には既に、黄河中下流域に居住しており、商代の金文と甲骨文字は現在知られる最も早い漢字である。

(2) チベット語と嘉絨(jiarong)語

チベット語は、漢蔵語系蔵緬(Tibeto-Burman)語族チベット語支(或いはチベット-シマラヤ語支)に属し、有康・安多・衛蔵の三種類の方言がある。チベット語は主にチベット・四川・青海・甘粛・雲南に分布し、387万人が使用している(1982年)。この他にインド(10万人使用、1986年)・ブータン(3000人使用、1973年)にも分布する。チベット族のほかには、モンゴル族・土(トウ)族・ウイグル族の中でも、一部の人間はチベット語を第一言語としている。大多数のチベット族の人はチベット語を母語とし、一部のチベット人が漢語・嘉絨語・羌(チャン)語・普米(プシ)語・爾蘇(ersu)語・納木義(namuyi)語・木雅(muya)語・史興(shixing)語・扎巴(zhaba)語・却隅(queyu)語・貴諒(guiqun)語を使用する。紀元7世紀の時代、チベット人はサンスクリット語を参照して自分の表音文字を創出・制定した。

嘉絨語は、蔵緬語族チベット語支に属し、主に四川に分布する。東部・北部・西部の三種類の方言があり、約10万人が使用する(1990年)。

(3) 門巴(メンバ)語

門巴(メンバ)族が使用する言語である。門巴族はチベット東南部の墨脱県・錯那県・林芝県及び門這旺地区に分布する。門巴語には2種類ある。倉洛(cangluo)門巴語と墨脱門巴語で、どちらも蔵緬語族チベット語支に属する言語である。この2種類の言葉は通じない。門巴人のうち約82%が倉洛門巴語を使用し、18%が墨脱門巴語を使用する(1982年)。そ

の他にインドで2400人が門巴語を使用する(1982年)。一部の門巴人はチベット語或いは漢語にも通じている。

(4) 羌(チャン)語

羌語は、漢チベット語系蔵緬語族羌語支に属し、南北二種の方言がある。北部方言の単語には重音があり、音節声調はない。南部方言には音節声調があり、単語の重音はない。ふたつの基本語彙は相似しているが、語法には一定の差がある。羌族は主に四川阿壩チベット族・羌族自治州に分布し、人口は約19.8万人である(1990年)。羌語を使用する者が62%を占め、その他は既に漢語を用いるようになっていく。約4万のチベット人が羌語を第一言語とする。羌族の祖はおそらく春秋戦国時代に甘粛・青海地区から岷江上流まで移ってきたと思われる。

(5) 普米(ブミ)語

普米語は、蔵緬語族羌語支に属し、南北二種の方言に分けられる。主に雲南と四川の一部の地域に分布する。普米族は約3万人であり(1990年)、その内71%が普米語を使用する(1982年)。この他に漢語・白(ペー)語・納西(ナシ)語・彝(イ)語も使用される。歴史的には、かつてはチベット語を用いて普米語を音写し、それは多く宗教経文の中に用いられた。チベット族中2.6万人が普米語を話す。

(6) 景頗(チンポー)語と載瓦(zaiwa)語

景頗語と載瓦語は景頗族の言語である。

景頗語は、蔵緬語族景頗語支に属し、2.4万人が使用する(1982年)。元来19世紀末に創出・制定されたアルファベットであり、解放後に改善された。中国国境外の景頗語は克欽語(Kachin)と呼ばれ、ミャンマーで53万人が使用し(1983年)、インドで7200人が使用する(1983年)。

載瓦語は蔵緬語族緬語支に属し、載瓦・勒期(leqi)・浪峨(lange)・波拉(bola)の四種類の方言(異なった言語として扱われることもある)があり、7万人が使用する。

(7) 独竜(トールン)語

独竜語は、蔵緬語族景頗語支に属する。独竜河と怒江の2種類の方言に区分され、この二つは互に通じる。独竜族は5千8百人あまり(1990)、全員が独竜語を使用し、少数漢語も併せて通じる。怒(ヌー)族は6千人が独竜語を話し、ミャンマーでも2万人が独竜語を話す。

(8) 珞巴(ロッパ)語

珞巴語はまた崩尼・博嘎爾(bengni-bogeer)語とも称され、蔵緬語族景頗語支に属する。崩尼(bengni)・博嘎爾(bogeer)・達木(damu)の三種の、互に通じることのできる方言がある。珞巴族は2000人あまりで(1990年)、その内600人あまりがチベット語を使うようになった。中国とインドが争議中の地域では、他に20万人が珞巴語を使用している

(1990年)。

(9) 阿昌(アシェ)語

阿昌語は蔵緬語族緬語支に属し、隴川・梁河・潞西の三種類の方言がある。阿昌語は、主に雲南南徳宏傣(タイ)族・景頗族自治州に分布し、2.7万人あまりの阿昌人の内、大多数が阿昌語を話す(1990年)。約2800人が既に漢語を話すようになった。他に7500人が阿昌語と併せて漢語も話すことができ、約3000人が併せて載瓦語を話し、2000人が併せて傣(タイ)語を話す。

(10) 彝(イ)語

彝語は蔵緬語族彝語支に属し、北部・東部・南部・西部・南東部と中部の6つの方言があり、507万人が使用している。彝語には表音の単音節文字があり、字形は漢字に近い。明時代の金石彝文は既に発見されている。彝語の方言は複雑で、異なる地域の彝文の書き方も統一されていない。1975年四川彝族地区には彝文の統一文字が推し広げられている。彝族の中にすでに38万人が漢語を使うようになり、少数の人がモンゴル語や普米語を話す。彝語を母語としている彝族人の中に漢語も併せて通じる(第2言語)。その他に、少数の人はチベット語・拉祜(ラフ)語・白語・哈尼(ハニ)語あるいは納西(ナシ)語を併せて通じる。彝族の群体に侗台(dongtai)語族佧央(geyang)語支の拉基(laji)語と普標(bubiao)語の人がいる。

(11) 哈尼(ハニ)語

哈尼語は蔵緬語族彝語支に属し、哈雅(haya)・碧卡(bika)・豪白(haobai)の3種類の方言がある。125万の哈尼人の中に圧倒的多数の人は哈尼語を話し(1990)、約1000人はすでに漢語に転じ、48万人は漢語を第2言語とし、また少数の人は彝語や傣語も通じる。その他に哈尼語はまたメンマ(6万人使用)・タイ王国(3.5万人使用)・ベトナム(2万人使用)とラオス(1万人使用)に分布する。

(12) 傣(リス)語

傣語は蔵緬語族彝語支に属し、怒江・永勝・禄勳の3種類の方言がある。57万人の傣族の圧倒的多数は傣語を使用し(1990年)、約9.7万人が漢語を併せて通じ、3.5万人が白語を併せて通じ、2万人が彝語を、1万人が納西語を併せて通じ、また少数の人が阿昌語、載瓦語、怒(ヌー)語も通じる(1982年)。20世紀初頭、西側の伝教師は大文字のアルファベットを用いて、声母と韻母を表示する表音文字を創製し、20世紀20年代に雲南省維西傣族自治县の汪忍波が一種の音節文字を創製し、50年代には6個のアルファベットを用いる新しい表音文字が創製された。傣語はまたメンマ(12.6万人使用・1987年)・タイ王国(1.3万人使用)に分布する。

(13) 拉祜(ラフ)語と畢蘇(bisu)語

拉祜語は蔵緬語族彝語支に属し、拉祜納と拉祜熙の2種類の方言がある。拉祜族は雲南省

瀾滄江の東西兩岸の思茅、臨滄地区に分布しており、41万人の圧倒的多数が本民族の言葉を話し（1990年）、少数の人が漢語に転じ、9万人が合わせて漢語も通じる（1982年）。その他、拉祜語はメンマ（6.7～9万人使用、1983年）、ラオス（2000～3000人使用、1973年）、タイ王国（2.3万人使用）に分布する。

雲南省の勐海、瀾滄の約6000の畢蘇（bisu）人も拉祜族で、畢蘇語を使用する。畢蘇語は哈尼語に比較的に近い。

（14） 納西（ナシ）語

納西語は蔵緬語族彝語支に属し、東、西の2種類の方言がある。納西族は27.7万人で（1990年）、95%の人が納西語を使用し、1万人はすでに漢語に転じた（1982年）。納西語を使用している納西族人の中に13万人が漢語をも併せて通じ、1万人あまりが僮僮語も通じ、1万人がチベット語も通じ、数千人が白語あるいは彝語をも通じる（1982年）。また、モンゴル族の中に1万人あまりが納西語を話す。納西語にはもともと2種類の文字がある。その中に表意の東巴文字は絵文字で、表音の哥巴文字は音節文字である。東巴文字は歴史悠久で、これを用いて書かれたお経は絵本に類似で、文字の変化経緯を研究する重要な資料と思われる。

（15） 基諾（チノー）語

基諾語は蔵緬語族彝語支に属し、攸楽と遠補の2種類の方言がある。その2つの方言は差異が著しく、互に通じない。基諾族は1.8万人があり（1990年）、全員が基諾語を使用し、約半数の人が併せて漢語も通じ、少数の人が併せて傣語も通じる。

（16） 怒蘇（nusu）語、阿儂（a'nong）語と柔若（rouruo）語

怒（ヌー）族雲南省の瀘水・福貢・貢山及び蘭坪・維西などに分布し、2.7万人あまりである（1990年）。瀘水及び福貢のある怒族は「怒蘇」と自称し、福貢の木古甲の怒族は「阿儂」と自称し、蘭坪の怒族は「柔若」と自称する。この3種類の言葉は互に通じない。研究によると、怒蘇語と柔若語は彝語支に属し、阿儂語は景頗語支に属する。怒蘇語を使用しているのは8400人で、阿儂語を使用しているのは600人で、柔若語を使用しているのは2500人（1982年）である。怒族の中にまた6000人が独竜語を使用、4000人が僮僮語を使用、1400人がすでに漢語に転じた。

（17） 土家（トゥチャ）語

土家語は蔵緬語族に属し、南・北という2種類の互に通じない方言がある。土家族は572.5万人（1990年）で、大部分はすでに漢語に転じ、まだ土家語を話しているのは20万人で、その中に15万人が併せて漢語も通じる。

（18） 白（ペー）語

白語は蔵緬語族に属し、劍川・大理と碧江の3種類の方言がある。白族は雲南省の大理に集まって居住するが、雲南省のほかのところや、貴州省・四川省の一部地域及び湖北省の桑

植にも分布する。白族は159.8万人（1990年）である。その中に103万人が白語を使用し、2000人あまりが普米語に転じ、61.5万人が併せて漢語も通じ、6万人が傣僳語をも併せて通じ、1.5万人が納西語をも併せて通じる（1982年）。相当な白族の人がすでに漢語を使うようになった。唐代から白族はすでに漢字を基礎としている白文を使用し始め、唐・宋・元・明諸代の白文の文献や碑がいまだに保存されている。

(19) 壮（チワン）語

壮語は漢チベット語系侗台語族壮傣語支に属し、南・北の2種類の方言がある。北部方言は布依（ブイ）語に通じる。壮族及びその言葉は広西壮族自治区・雲南省の部分地域及び広東・湖南・貴州と海南島に分布する。壮族は1555.5万人あまりで（1990）、97%の壮族は壮語を母語とし、その中に56%の人が併せて漢語も通じ、40万人がすでに漢語に転じた（1982年）。ほかに少数の人は侗語・水語・毛南（マオナン）語・仂佬語・勉語などの言葉も通じる。約南宋の時から壮族はすでに漢字を基礎として作った四角形の壮字を使用し始めた。1950年代からアルファベットで表音する文字を使用し始めた。壮族中に少数の人は侗台語族仂央語支の布央語を使用する。

(20) 布依（ブイ）語

布依語は侗台語族壮傣語支に属し、言葉内部には差がそれほど大きくなく、壮語の北部方言と通じる。布依族及びその言語は貴州の南部・南西部及び雲南省と四川省の一部地域に分布する。布依族は254.8万人である（1990年）。その中に193万人が布依語を母語とし、19万人がすでに漢語を使用するに転じる。布依語を使用する布依族の人の中に115万人が併せて漢語も通じる（1982年）。その他に少数の人が水（スイ）語と苗（ミャオ）語も通じる。ベトナムに1.3万人が布依語を話す。

(21) 傣（タイ）語

傣語は侗台語族壮傣語支に属し、西双版纳（シーサンパンナ）・徳宏・紅金・金平の4種類の方言があり、壮語の南部方言を大体通じる。傣族及びその言葉は主に雲南省の西双版纳・徳宏・耿馬・孟連などのところに分布する。傣族は102.5万人である。その中に圧倒的多数のひとが傣語を使用し、漢語を使用することに転じた人がただ4万人である（1982年）。本民族を用いる傣族の中に31万人あまりが併せて漢語も通じ、1万人が併せて載瓦語も通じ、5000人が併せて拉祜（ラフ）語も通じる（1982年）。ベトナムには69万人が傣語を使用する。その中に金平方言である黒傣語を用いるのが50万人で、白傣語を用いるのが19万人である（1990年）。黒傣語はまたタイ王国及び他の一部地区に、白傣語はラオスなど地区に分布する。傣語の徳宏方言である傣仂語はメンマに7.2万人が使用し（1983年）、ラオスには12万人が使用する（1990年）。

また傣語の西双版纳方言である泰潞（tailu）語は、メンマには20万人（1981年）、タイ王国には5万人（1975年）・ラオスには1.6万人（1962年）・ベトナムには3000人（1959年）が使用する。

中国の傣族にはもともと4種類の文字がある。その中に金平傣文（傣端文とも言う）と傣

緋文の使用範囲は狭くないが、西双版納緋文である傣仂文と徳宏緋文である傣哪文が比較的
に通用される。この4種類の文字とも婆羅米 (Brahmi) 文字から変化してきたもので、ラ
オス・タイ王国・メンマ・カンボジアの文字と同じ体系に属する。その中に傣仂文は少なく
とも七、八百年にわたって使用されてきており、傣哪文は14世紀から使われている。1950
年代に傣仂文と傣哪文は改進を経て使用を広く進められた。

(22) 侗 (トン) 語

侗語は漢チベット語系侗台 (dongtai) 語族侗水語支に属し、南・北の2種類の方言があ
る。侗族及びその言葉は湖南省・貴州省・広西壮族自治区の3省区の境を接する地域に分布
する。侗族は250.8万人がある(1990年)。その中に78%の人が侗語を母語とし、38万人
が併せて漢語も通じ、3万人が併せて苗語も通じ、1万人が布依語あるいは壮語も併せて通
じる。31万人がすでに漢語を使用することに転じる(1982年)。

侗語は壮語の北部方言と49%の用語が似ており、布央語と28%の用語・仂佬語と24%
の用語が類似する。

(23) 仂佬 (ムーラオ) 語

仂佬語は侗台語族水語支に属し、方言の差は小さくなく、互に通じる。仂佬族の圧倒的
多数の人は広西の羅城に居住し、残りは広西の宜山・柳城・都安・忻城などのところに分布
する。仂佬族は16万人がある(1990年)。仂佬族の人は通常仂佬語を使用し、半数以上が
併せて漢語も通じ、7000人が併せて壮語も通じる(1982年)。仂佬語の基本用語の中には侗
語と同じ語源のものが65.6%を占め、壮語と同じ語源が53.5%を占める。

(24) 水語・佯僂 (yanghuang) 語・莫 (mo) 語と錦 (jin) 語

水語は侗水語支に属する。その内部には方言の差がないが、三洞・陽安・潘洞の3種類の
土着語がある。水族は34.7万人いる(1990年)が、主に貴州の三都に居住し、貴州のほか
のところや広西にも分布する。圧倒的な水族が水語を話し、その中に10万人が併せて漢語
も通じ、1.7万人がすでに漢語を使用することに転じる(1982年)。かつて、水族の占い師
が使用した文字は「水書」あるいは「水字」と呼ぶ。「水書」の一部の字は古代漢字と相似
で、その中に漢字を逆さまに書くや反転して書くものがあるし、自ら作った字もある。

佯僂語・莫語と錦語はみなに属し、毛南 (マオナン) 族・布依族と水族の人の言葉である。
佯僂語を話すのが2万人で、莫語を話すのが4400人で、錦語を話すのが2000人~3000人
程度である。

(25) 毛南 (マオナン) 語

毛南語は侗水語支に属し、毛難語とも呼び、主に広西壮族自治区の環江県下南郷あたりに
分布する。毛南族は7.2万人であり(1990年)、その中に2.8万人が毛南語を使用し、5000
人が壮語を使用する。そのほかの人が漢語を使用する。毛南語を話す人の中に半数以上が併
せて漢語も通じる。

(26) 黎(リー)語

黎語は侗台語族黎語支に属し、俅・杞・本地・美孚・加茂の5種類の方言がある。俅・杞・本地・美孚の4つの方言は比較的に近いで、互に通じる。加茂方言はあの4つの方言との差が大きい。黎族は主に海南黎族苗族自治州に居住し、111万人あまりである(1990年)。その中に73万人が黎語を使用し、黎語を使用する人の中に46万人が併せて漢語も通じる(1982年)。

(27) 仡佬(コウラオ)語

仡佬語は侗台語族仡央語支に属し、稿・阿欧・哈給・多羅の4種類の方言がある。それぞれの方言の間に差が比較的が大きく、同じ地域の異なる方言も互に通じないことが多い。仡佬族の大部分は貴州省の北西・南西と北部に分散して居住し、少数の人は広西と雲南に居住する。仡佬族は5.4万人であり(1990年)、その中に仡佬語を使用するのが6000人で、4.7万人がすでに漢語を使うことになった(1982年)。またベトナムには6700人が仡佬語を使用する(1984年)。

(28) 苗(ミャオ)語

苗語は漢チベット語系苗瑶語族苗語支に属し、国境以内に湘西・黔東・川黔滇の3種類の方言がある。それぞれの方言はまたさらに2種類あるいは2種類以上の次方言か土着語に分けることができる。これらの方言の間に差が比較的が大きくて、互に通じない。苗族とその言葉は貴州・湖南・雲南・広西・四川・広東及び湖北に分布する。苗族は738万人であり(1990年)、その中に406万人が苗語を使用、123万人が併せて漢語も通じ、78万人がすでに漢語を使うことになった(1982年)。ほかに苗語はまたベトナム(41万人使用)・ラオス(20万人使用)・タイ王国(5.7万人使用)・メンマ(7000人使用)にそれぞれ分布する。

20世紀初頭、イギリスの伝教師は苗族の人と協力して、苗語川黔滇方言の滇東北次方言のために一種の表音文字を設計し、伝教に用いた。1950年代以降、上述の3つの方言にアルファベットを用いる表音文字を付け、また滇東北次方言の古い文字に対して改造を行った。

(29) 畚(シェー)語

畚語は(畚語支という説も)に属し、蓮花、羅浮の2種類の方言があり、方言の間に差が大きくなり、互いに自由に通じる。畚族は福建・浙江・広西・広東・安徽に分布し、その居住の特徴は広範囲に分散的で、小範囲に集中的である。畚族は63万人であるが(1990年)、畚語を使用するのがわずか1000人程度で、他の人はすでに畚語の色彩を帯びている漢語の客家方言に転じる。

(30) 勉(mian)語・布努(bunu)語と拉珈(lajia)語

勉語・布努語と拉珈語は瑶族の人の言語である。

瑶族は主に広西・湖南・雲南・広東・貴州・江西に分布し、213.7万人である(1990年)。瑶族の人は「勉」「金門」「布努」「瑠旁」「甘迪門」「拉珈」「巴哼」「炯奈」「藻敏」等と自称する。瑶族の人は使用している勉語・布努語と拉珈語が3種類の異なる言語である。

勉語は苗瑶語族苗語支に属し、勉一金・標一交・藻敏の3種類の方言がある。その中に勉一金方言には優勉・標曼と金門3種類の土着語がある。「勉」と自称する瑶族の支系は94万人であり、その中に66万人が勉語を話し、35万人が併せて漢語も通じる(1982年)。勉語はまたベトナム(30万人あるいはそれ以上)・タイ王国(3.4万人)・ラオス(6万人)・フランス(2000人)・アメリカ(2000年)に分布する。

布努語は苗瑶語族苗語支に属し、布一瑠・巴啞・唔奈・炯奈・優諾の5種類の方言がある。近年、巴啞・炯奈は独立の言語という主張がある。布努人が45万人で、その中に布努語を使用する人が31万人あまりで、壮語を使用する人が12.8万人で、漢語を使用する人が6000人(1982年)である。一部の布努人が併せて壮語・漢語あるいは侗語も通じる。

拉珈語は侗台語族侗水語支に属し、異なる村の拉珈語は互に通じる。拉珈人は広西の金秀に分布し、1.1万人である。その中に8000人あまりが拉珈語を使用する(1982年)。拉珈語は壮語の北部方言と近い。また侗語の45%の用語と近い。布央語の24%の用語と近い。仡佬語の22%の用語と近い。

(31) モンゴル語と図瓦(tuwa)語

モンゴル語はアルタイ語系モンゴル語支に属し、西部(衛拉特)・中部(内モンゴル)と北東部(巴爾虎布里亞特)の3種類の方言がある。中国国境以内のモンゴル族は内モンゴル自治区・新疆ウイグル自治区・青海・甘肅・黒龍江・吉林・遼寧省など集めて居住し、480万人がある(1990年)。その中に273万人がモンゴル語を使用し、64万人が漢語を使用し、1.8万人がチベット語を使用し、また1.4万人が一種の納西語に近い言葉を話し、6000人が一種の彝語に近い卡桌(kazhuo)語を話す(1982年)。モンゴル族の中に漢語も併せて通じる人が102万人、ウイグル語も併せて通じる人が3.7万人、カザフ語も併せて通じる人が3万人(1982年)がある。モンゴル国には188万人がモンゴル語を使用し(1989年)、ロシアには1700人がモンゴル語を使用する(1959年)。

13世紀、元の世祖フビライは国師に命じ、主にチベット文字の構成をもとに、幾つかのサンスクリット文字と新造文字を補って、モンゴル文字を制定した。これがパスパ文字である。これは、元王朝滅亡後徐々に廃れていった。その後のモンゴル語は、回鶻(カイコツ)式モンゴル文字と呼ばれ、その文字の読み・筆記規則・字配りとも回鶻文に相似している。現存する最も早い時期の回鶻式モンゴル語の資料は、1225年の《也松格碑銘》である。

図瓦語はアルタイ語系突厥語族東匈語支(あるいは東北語支)に属する。新疆アルタイ地区には2000名のモンゴル族とされる図瓦人が、図瓦語を使用する。ほかに図瓦語はまたロシアに(16.5万人使用、1979年)、モンゴル国に(2.5万人使用、1985年)分布する。

(32) 東郷語

東郷語はモンゴル語族に属し、主に甘肅臨安回族自治州に分布する。24万人あまりが使用し、その中に15万人が漢語を第2言語とする。

(33) 土(ドウ)族語

土族語はモンゴル語族に属し、主に青海の東部地域に分布する。土族は19万人である

(1990年)。その中に62.5%の人が土族語を使用し、25%の人が漢語を使用し、残りの人が保安(ボウナン)語・チベット語を使用する(1982年)。大多数の土族人は合わせて漢語も通じる。

(34) 達斡爾(ダフル)語

達斡爾語はモンゴル語族に属し、主に内モンゴルの呼倫貝爾、黒龍江の齊齊哈爾・竜江及び新疆の塔城に分布し、布特哈・齊齊哈爾・海拉爾・新疆の4種類の方言がある。達斡爾族は12万人であり(1990年)、大体達斡爾語を使用し、少数の人が漢語を使うようになった。本民族の言葉を使用する達斡爾人の中に6万人が併せて漢語も通じ、2.8万人が併せてモンゴル語も通じ、数千人が鄂温克(エヴェンキ)語あるいはカザフ語をも併せて通じる(1982年)。

(35) 保安(ボウナン)語

保安語はモンゴル語族に属し、大河家と同仁の2種類の方言がある。保安族は1.2万人である(1990年)。保安語を使用するのが6000人で、その中に5000人あまりの人が併せて漢語も通じる(1982年)。土族の中にも3000人あまりの人が保安語を使用する。

(36) 東部裕固(ユーク)語と西部裕固語

東部裕固語と西部裕固語は裕固族の言語である。裕固族は合わせて1.2万人である(1990年)。甘粛南部の裕固族自治県の東に居住する裕固族は東部裕固語を使用し、西に居住する裕固族は西部裕固語を使用する。

西部裕固語は突厥語族に属し、ウイグル語に近いで、4500人あまりが使用する。裕固人の中の少数が2種類の裕固語とも通じ、2600人あまりの人が併せて漢語も通じる(1982年)。

(37) 満語

満語はアルタイ語系満-ツングース語族満語支に属し、差が大きい南・北の2種類方言があり、同じ語支の錫伯(シボ)語や赫哲(ホジェン)語と概ねに話を通じる。満族は中国国境以内各地に分布し、遼寧省が一番多く984万人あまりである(1990年)。満族の人は基本的に漢語を使うようになり、満語がわかるあるいは話せる人がわずか500人程度である。達斡爾族・鄂倫春(オロチョン)族・鄂温克族の中に200足らずの人が併せて満語も通じる(1982年)。

金代の女真語は満語の前身である。女真人は契丹字と漢字を模倣して女真字を創製した。1119年に女真大字を公布し、1138年に女真小字を公表した。満族の人は中原に進入する前にモンゴル語の字を基礎にして「圈点を付けない満文」を創製・公表し、その後、改進して「圈点をつける満文」と呼ぶ。満族の人は中原に進入してから普遍的に漢語・漢文の使用に慣れる。

(38) 錫伯(シボ)語

錫伯語は満-ツングース語族満語支に属し、満語・赫哲語と大体通じる。錫伯族の人は主に

遼寧・吉林と黒龍江に分布し、一部は新疆に居住する。錫伯族は17万人あまりである(1990年)。その中に錫伯語を使用するのは2.7万人あまり(1982年)で、新疆に居住する錫伯族である。東北三省の錫伯人はすでに漢語・漢文使用に改めた。錫伯文は満文を基礎にして改進した表音文字である。

(39) 赫哲(ホジェン)語錫伯

赫哲語は満一ツングース語族満語支に属し、奇楞・赫真の2種類の方言があり、満語・錫伯語と大体通じる。赫哲族の人は黒龍江省に分布し、4000人あまりである。圧倒的多数の赫哲族人はすでに漢語に転じ、赫哲語を使用する人が200人である。ロシアには1.05万の赫哲族があり、その中に7000人が赫哲語を使用する。ロシアの赫哲人は「那乃(Nanai)」と自称し、彼らの言葉は「那乃語」で、即ち中国の赫真方言である。

(40) 鄂温克(エヴェンキ)語

鄂温克語は満一ツングース語ツングース族語支に属し、海拉爾・陳巴爾虎・額爾古納の3種類の方言があり、鄂倫春(オロチョン)語と概ね通じる。鄂温克族は主に内モンゴルと黒龍江に分布し、2.6万人がある(1990年)。その中に1.7万人が鄂温克語を使用し、2000人がすでに漢語を使うようになった(1982年)。鄂温克族の中に9800人が併せて漢語も通じ、9000人がモンゴル語も通じ、8000人が達斡爾語も通じ、少数の人が併せて鄂倫春語や満語も通じる(1982年)。鄂温克語はまたツングース(Evenki)語、あるいは索倫(Tungus)語とも呼び、ロシア(1.2万人使用、1979年)とモンゴル(2000人使用、1982年)にも分布する。

(41) 鄂倫春(オロチョン)語

鄂倫春語は満一ツングース語ツングース族語支に属し、方言の差がなく、鄂温克語と概ねに通じ、内モンゴルと黒龍江に分布する。鄂倫春族は7000人があり(1990年)、その中に2100人が鄂倫春語を使用し、2000人は漢語を使うようになった(1982年)。本民族の言葉を使用する鄂倫春族の人は大体併せて漢語も通じる。少なくない鄂倫春族の人が併せて達斡爾語・鄂温克語、あるいはモンゴル語も通じる。

(42) ウイグル語

ウイグルはアルタイ語系突厥語族西匈語支(別の分類で東南語支)に属し、中心・和田・羅布の3種類の方言がある。ウイグル語はウズベク語・キルギス語・タタール語・カザフ語と概ねに通じる。ウイグル族の大部分は新疆の天山より南方に集落し、少数は湖南に分布し、あわせて720万人がある(1990年)。99%以上のウイグル人はウイグル語を使用し、併せて漢語も通じるのが2.4万あまり、漢語を使うようになったのが5000人あまりである(1982年)。ウイグル語はまたカザフスタン・キルギスタン・ウズベキスタン(あわせて24.5万人使用、1986年)・アフガニスタン(3000人使用、1981年)・モンゴル国(1000人使用、1981年)・トルコ(500人使用、1981年)に分布する。

ウイグル族の祖は回鶻と呼び、突厥文(オルホン—エニセイ文)を使用した。10世紀末、

イスラム教の伝入につれて、ウイグル人は次第に回鶻文字を捨てて、アラビア文字に改めた。

新疆に居住する艾努人 (ainu) はウイグル族の一部で、約 5000 人があり (1988 年)、艾努語を使用する。艾努語の文法はウイグル語と同じで、ウイグル語と同じ用語が 65% を占めて、ウイグル語の 1 つ集団方言である。使用者があわせてウイグル語も通じる。

(43) カザフ語

カザフ語は突厥語族西匈語支に属し、同じ語支のウイグル語・ウズベク語と通じる。カザフ族は主に新疆に、少数が甘肅に分布し、111 万人がある (1990 年)。圧倒的多数のカザフ人はカザフ語を使用し、7 万人あまりが併せて漢語も通じ、4 万人がウイグル語も通じる (1982 年)。中国国境以内のカザフ人は 13 世紀からアラビア語文字を用いて自分の言葉を音写する。カザフ語はまたカザフスタン (665.6 万人使用、1979 年)・モンゴル国 (10 万人使用)・イラン (3000 人使用、1982 年)・アフガニスタン (2000 人使用、1991 年)・トルコ (600 人使用、1982 年) に分布する。

(44) ウズベク語

ウズベクは突厥語族西匈語支 (西北語支) に属し、主に新疆に分布する。ウズベク族は 1.4 万人があり (1990 年)、約 42% のウズベク人はウズベク語を使用し、他の人はウイグル語・カザフ語あるいはキルギス語を使用する (1982 年)。ウズベク語はまたウズベクスタン (1500 人使用、1986 年)・アフガニスタン (南部方言、140 万人使用、1990 年)・トルコ (南部方言、2000 人使用、1982 年) に分布する。

(45) 撒拉 (サラ) 語

撒拉語は突厥語族西匈語支に属し、青海・甘肅に分布する。撒拉族は 8.7 万人があり (1990 年)、圧倒的多数の人が撒拉語を使用する。大部分の人がある程度に漢語を話せ、約 6000 人がすでに漢語を使うようになった (1982 年)。

(46) 塔塔爾 (タタール) 語

塔塔爾語は突厥語族西匈語支に属し、ウイグル語などのその他の西匈語支言語と大体通じる。塔塔爾族の人は新疆に分布し、5000 人があり (1990 年)。その中に 1000 人が塔塔爾語を使用し、大多数の人はすでにウイグル語あるいはカザフ語を使うようになった (1982 年)。中国に塔塔爾語はダッダン語と大体同じである。19 世紀のとき、ダッダン人が中国に遷移してきて、中国の塔塔爾人になった。ロシアにはダッダン人が 664.5 万人あり、その中に 571.5 万人がダッダン語を使用し (1990 年)、ほかに 37 万のバシュキール (Bashkrskaja) 人がダッダル語を使用する。ダッダル語はまたアメリカ (2000~1 万人使用)・アフガニスタン (350 人使用) に分布する。

(47) キルギス語

キルギス (柯爾克孜) 語は突厥語族東匈語支に属し、即ち中国国境以外のキルギス (吉爾吉斯) 語である。キルギス族の人が主に新疆に分布し、少数の人が黒龍江の富裕県に分布し、

あわせて14.3万人あまりである（1990年）。その中に大多数の人がキルギス語を使用し、大半の人が併せてウイグル語も通じ、8000人がすでにウイグル語を使うようになり（1982年）、少数の人が漢語やカザフ語を使うようになった。キルギス人は突厥文とアラビア文字のチャガタイ文を使用した。1950年代から修訂したアラビア文字を使用する。キルギス（吉爾吉斯）語は主にキルギススタン（190.6万人使用）に分布し、ほかにアフガニスタン（500人使用）とトルコ（1100人使用）に分布する。

（48）朝鮮語

朝鮮語はアルタイ諸語と文法類型上に類似し、漢語からの借り用語が多数ある。済州島方言を除けば、その他の方言の間に差が大きくなり、互に通じる。中国国境以内の朝鮮族は主に吉林省に分布し、次は黒龍江省と遼寧省で、そして内モンゴルとその他の各地に点在する。朝鮮族は192.3万人あまりで（1990年）、朝鮮族の人は一般的に朝鮮語を母語とし、44%の人が併せて漢語も通じ（1982年）、少数の人がすでに漢語を使うようになった。中国の朝鮮族は明の末期・清の初頭から朝鮮半島から遷してきた。15世紀前、朝鮮半島は漢文を書面語として、漢字の音と義を借りて朝鮮語を表し、「吏読」と呼ぶ。また、15世紀に創製された音素文字はいまだに使われている。

（49）高山族の言語

高山族は主に中国の台湾省に分布し、少数の人が中国の大陸に分布する。名称が高山族であるが、実際は高山族と平埔族を含める。高山族はもともと山に居住し、九つの族があり、平埔族は平地に居住し、10の族がある。高山族には邵・鄒・阿眉斯・泰耶爾・賽徳・排湾・布農・卑南・卡那卡那布・沙阿魯沙・魯凱・薩斯特・耶眉・巴則海・噶瑪蘭など20種類以上の言葉があり、その中に幾つかの言葉はすでに話せる人がいない。これらの言葉は南島語系インドネシア語族に属する。

阿眉斯（Amis）語は使用する人がまた13万人おり（1986年）、7種類の方言があり、あ一部の方言は相違が非常に大きくて、近い用語は50%しかない。

泰耶爾（Tayal）語は2種類の方言があり、4.1万人使用する（1978年）。

賽徳（Sediq）語は2.5万人が使用する（1978年）。

布農（bunun）語は7種類の方言があり、3.2万人が使用する（1978年）。

排湾（Paiwan）語は5.3万人が使用する（1978年）。

卑南（Pilam, Pyuma）語は7200人使用する（1978年）。

魯凱（Rukai）語は6300人使用する（1977年）。

薩斯特（Saisiat）語は3200人使用する（1978年）。

鄒（Tsou）語・卡那卡那布（Kanakanabu）語・沙阿魯阿（Saaroa）語はあわせて5000人が使用する（1982年）。

耶眉（Yami）語は3000人が使用する（1990年）。

巴則海（Pazeh）語は何人かの老人しか話せない（1990年）。

噶瑪蘭（Kamalan, Kavalan）語は1977年にまた160人が使用していたが、1990年現在には少数老人しか話せない。

(52) 徳昂（ドアン）語

徳昂語はまた崩竜（Palung）語と呼び、南アジア語系孟高棉（キメル）語族に属し、布雷・納昂・若買の3種類の方言がある。若買方言は布雷・納昂方言と通じない。徳昂族の人は雲南省の徳宏・保山・臨滄・思茅などに分布し、1.5万人あまりがある（1990年）。その中に1.1万人が徳昂語使用し、4000人が併せて漢語も通じ、少なくない人が併せて傣語あるいは載瓦語・景頗語・阿昌語等の言語も通じる（1892年）。メンマの崩竜（Palung）語は即ち徳昂語で、3種類の方言があり、48～58万人が使用する。タイ王国には5000人が布雷語を使用する（1989年）。

(53) 京語

京語は南アジア語系孟高棉（キメル）語族に属し、広西の防城に分布する。京族は即ち越族で、16世紀初頭にベトナムの塗山から続々と遷移してきて、1.8万人がある（1990年）。その中に61%の人が京語を使用し、その他の人がすでに漢語を使うようになり、京語を使用する人は基本的に併せて漢語も通じる（1982年）。京語は即ちベトナム語で、主にベトナムに分布する（5445万人使用、1986年）。ほかにアメリカ（60万人使用、1990年）、カンボジア（30万人使用）、ラオス（7万人使用）にも分布する。

(54) タジク語

タジク語は印欧語系イラン語族パミール語支に属し、新疆の南西部に分布する。タジク族は3.3万人あまりがあり（1990年）、その中に89%の人がタジク語を使用し（1982年）、その他の人がすでにウイグル語に転じた。タジク語を使用する人の中には約1万人が併せてウイグル語も通じ、少数の人が併せて漢語あるいはキルギス語も通じる。タジク族の人はかつてペルシア語の文字を使用し、1930年代からアラビア語の文字に改めた。中国のタジク語はまた薩里庫爾（Sarikoli）語と称し、ロシア・アフガニスタンのタジク（Tajik）語と通じなく、タジクスターンのタジク語とも違う。

(55) ロシア語

ロシア語は印欧語系スラブ語族東支に属し、新疆の北部・黒龍江・内モンゴルに分布する。中国のロシア族人は1.3万人あまりであり（1990年）、新疆には2900人あまりのロシア族の人がロシア語を使用する（1982年）。

(56) その他の言語

海南島・広東に60万あまりの人が臨高語・村話・標話を使用し、これらの言葉は漢蔵語系侗台語族に属する。

香港には2万人が英語を使用し（1979）、4000人がマカオの克里奥爾式ポルトガル語（Macau Creole Portugese, 1977年）を使用し、この言葉はすでに流行していない。

台湾では5000人が日本語を使用する（1979年）。

五色話、は広西の融水に分布し、漢語の影響を受け、多数の漢語用語を借用する一種の壮侗語であり、混合語という説もある。約5000人がこの言葉を使用する（1990年）。

五屯話、は青海の同仁県に分布し、基本用語は漢語の用語をとし、文法はアルタイ語系の言語と密接関係がある言葉で、2000人が使用する（1982年）。

河州話、は甘肅の臨夏あたりに分布し、基本用語は漢語の用語をとし、文法はアルタイ語系の言語と密接関係がある言葉である。百万人以上の人が使用するという可能性がある（1995年）が、その他の状況についてさらに調査する必要がある。

俅語、南アジア語系孟高棉（キメル）語族に属し、広西の隆林に分布し、約500人の俅人が使用する（1996年）。俅人は約2000人であり、仡佬族に属する。

回輝話、南島語系インドネシア語族に属し、海南省の三亜市郊外に分布し、地元の回族の言葉である。地元で回族は4000人である（1988年）。

〈参考文献〉

1. 《ETHNOLOGUE, Languages of The World》 Thirteenth Edition, Barbara F. Grimes, USA, 1996
2. 《世界的書面語；使用程度和使用方式概況》 第4巻 - 第1冊、第2冊 G. D. 麥克康奈尔、譚克但、拉民尔大学加拿大、1995
3. 《中国少数民族言語使用情況》 中国社会科学院民族研究所 国家民族事務委員会文化伝司主編、中国藏学出版社 1994
4. 《我国瀕危語言問題研討會紀要》 民族語文雜誌社記者 「民族語文」2000年第6期
5. 《侗台語族概論》 梁敏、張均如、中国社会科学出版社 1996
6. 《仡佬語研究》 張濟民 貴州民族出版社 1993
7. 《Languages and Dialects of China》 李方桂 中国語言学報 Journal of Chinese Linguistics Vol. I. No. 1, January 1973
8. 《世界の言語》 北村甫編 大修館書店 講座言語第6巻 1981
9. 《Sino-Tibetan, a Conspectus》 Benedict, P. K. 1972
10. 《The reconstruction of Proto-Miao-Yao Tones》 張琨 中央研究員歴史語言研究所集刊 1973
11. 《Culture in History》 Diamond, S. 1960
12. 《Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese》 Karlgren, B. BMFEA 26. 1954
13. 《Grammata Serica Recensa》 Karlgren, B. BMFEA 29. 1957
14. 《The Tai and the Kam-Sui Languages》 李方桂 Lingua 14.
15. 《上古音研究（Studies on Archaic Chinese）》 李方桂 清華學報 N. S. 9. 1-2 1971
16. 《西夏語の研究》 二巻 西田龍雄 1964~66
17. 《Tocharisch》 Pedersen, H. 1941
18. 《Introduction to Mongolian Comparative Studies》 Poppe, N. N. 1955
19. 《Vergle chende Grammatik der Altaischen Sprachen, Teil 1, Vergleichende Lautlehre》 Poppe, N. N. 1960